

博物館学って何だろう？

上席総括学芸員 布谷知夫（博物館学）



民俗収蔵庫

前号までの「うみんど」の「研究最前線」で紹介されていたような田舟や昆虫、民具などと違って、「博物館学」の研究には対象にするモノが見えませ

ん。そのため博物館学って何、そんな学問ってあるの、といわれてきました。私が気に入っている博物館学の定義は、「博物館とは何か、いかにあるべきか、その活動のよりよいあり方とは何かを考察する科学」（加藤2000）というものです。そういう博物館学の例をいくつか紹介します。

博物館資料のあり方

博物館にはたくさんの資料が収蔵されていることは多くの人を知っていると思います。そしてこれまでの博物館学ではその資料を確実に永久保存するための技術を研究してきました。でもなぜ資料を保存するのかについてはあまり追及されていなかったように思います。資料を保存する理由は、過去から現在ま

での芸術、文化、自然、暮らしなどを実物や記録で将来に伝えるためであろうと思います。

未来の人が利用するためであれば、なぜ現在の人が過去や現在の資料や記録をもつと有効に、自由に使うことは考えなかったのでしょうか。そういう立場で博物館資料について考え直してみると、これまでとは違った考え方があることが分かります。利用しながら、劣化も避けるためには、どういう整理や保管の方法があるのか、さらにモノをすべて博物館に収蔵してしまつたのではなく、元の場所で保管することも考えると、収蔵している資料以外で、博物館が資料と位置づけるべき物や情報にはどのようなものがあるのか、またそういう広い意味での資料について考えると、博物館と資料にかかわる人や組織とのネットワークをどのように作っていくのか、というような問題（布谷2001）が新たに生じます。

また利用しやすい資料や利用



することの多い資料がどのようなにして博物館に集まってくるのか、ということについても、これまでとは違った考え方が必要になります。これまでの博物館資料は非常に限定的で、普遍的な価値のあるものとされてきました。そうではなく、普通のものや身近にあるものを利用する人たちが集めて、その資料の価値を作り出していくということが起こるようになりました。博物館の参加型調査などで集まる資料はそのような性格のもので

博物館の「教育活動」

博物館は勉強をするための場所というようにも考えられてきました。博物館の仕事のひとつ

を普及教育活動と呼んできたことにもそれが現れています。でも生涯学習の時代となり、博物館の役割も当然、変わってきているはずですが。琵琶湖博物館では博物館は人にモノを教える場所ではなく、たくさんの情報と人が行き来し、情報の交流をしながら人のネットワークを創る場所であると考えてきました。つまり人は自分の知識や個人史の中から多くの情報を持つており、その情報を博物館という場で相互に交換し、博物館からもたくさんの情報を発信することで、利用する人は自分の関心のある情報を選んで利用することで、さらに興味を広げていくようになるだろうということです。一方的に伝えられる教育ではなく、個人個人が選んで自



野外観察会



体験学習（わら細工）



環境展示室「農村のくらしと自然」



分なりの学びの機会を作り、そのことがほかの人とのかかわりを新しく生み出す、というような関係(布谷・磯野 2003)が生じるはずだ。

観察会や講座、フィールドレポーターや「はしかけ」などは、博物館が準備した機会とプログラムを、誰かに強制されるのではなく、自分で選んで参加し、興味のあることがあれば、納得がいくまで調べることができる。このように利用者個人の選択で決めることができる「自由な学び」をすることが博物館の特徴といえます。

展示の役割

そして同じことが展示室での展示のあり方にも言えるはずだ。博物館の展示は、ある「事実」が展示されていると考えられてきました。「事実」である以上はそれを覚えることが暗黙のうちに要求されていたと思われまふ。でも博物館は「事実」が展示されているのではなく、学芸員の考え方が展示されているのです。つまり博物館の展示室は、学芸員と共に、一緒に考える場所なのです。関心がある展示について、自分の知識や経験を思い出し、展示と対話しながら考える場所です。そしてこ

ういう展示室のあり方を考えること、展示の作り方自体が変わってきます。博物館の展示室は、展示を見る人が様々に考えることができるように情報を準備し、発信する場所なのです。

博物館学のありかたは

博物館学の定義を、「博物館の活動のよりよい在り方を考察する科学」とすると、博物館学は非常に実践的な学問ということになります。博物館学を研究することは、博物館の運営の方向を決めることになるからです。琵琶湖博物館の開館準備期間に私たちは「利用されること、成長発展する博物館」をひとつのスローガンとしていまし



シンポジウムの実施(1997年)

た。これは利用者、そして地域の人びとが主体となる博物館を作りたいという意思を明確に示したもの(布谷 1998)であり、利用者の視点を中心に示えた新しい博物館学を作り上げていく過程でした。そして今はさらに発展形の博物館像として、博物館の建物の中ではなく、より地域に広がっていく博物館活動のあり方(布谷 2003)について考えており、琵琶湖博物館の将来計画にも生かされています。博物館学とは、現場の博物館の運営方針に生かされて検証されることで、発展していく学問なのです。



上空から見た琵琶湖博物館(中島省三氏撮影)

参考文献

- ・加藤有次 2000 博物館学概論 『新版博物館学講座』 雄山閣
- ・布谷知夫 1998 参加型博物館に関する考察 『博物館学雑誌』 23(2)15-24
- ・布谷知夫 2001 博物館資料と研究およびその利用 『博物館学雑誌』 26(2)11-20
- ・布谷知夫 2003 日本における地域博物館という概念 『博物館学雑誌』 28(2)67-76
- ・布谷知夫・磯野なつ子 2003 博物館におけるコミュニケーションの在り方 『21世紀型ミュージアム・マネジメントの創造』 ミュージアム・マネジメント学会 58-63

博物館が準備している利用者の活動組織。ホームページ(<http://www.blm.go.jp/active/>)を参照